道徳学習指導案

指導者 大竹市立小方小学校
片平 千恵

- 1 日時 平成21年 6月30日(火) 第5校時
- 2 学年 第6学年1組 35名
- 3 主題名 愛校心〔内容項目4－(6)〕
- 4 ねらい 校章旗を掲げることが、学校の校風となっていることを知ることで前向きに取り組むようになった主人公の姿を通して、みんなで協力し合いよりよい校風をつくらうとする態度を育てる。
- 5 資料名 「ひるがえる校章旗」(出典：のびゆくこころ 日本書籍)
- 6 主題設定の理由

○主題観

本時の主題は、学習指導要領の「先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。」の内容項目にあたる。様々な活動におけるかかわりを通して、学級や学校全体に目を向けさせ、自分の役割と責任を自覚して、よりよい学校をつくらうと努力する児童を育てていくことは大切なことである。6年生は最高学年としての自覚をもち、学校を愛する心を具体化できる時期である。この時期に学校の一員としての自分の役割を自覚し、みんなで協力して自分たちの学校をよりよくしようとする心を育て、よりすばらしい校風をつくるために、積極的に取り組む態度を養い、具体的に実践していこうとする児童を育てていくことは大切である。そうすることで、校風を担っている自分への気付きと先生や学校の人々への敬愛の念が一層深められていく。

○児童観

本学級の児童は、委員会活動等に積極的に取り組むなど最高学年としての自覚をもち、学校や低学年の児童に対して何かしていきたいという気持ちをもっている。それを具体化するために、入学式や遠足、スポーツテストなどの行事の中で一緒に活動したり、給食や掃除の手伝いをしたりしてきた1年生との交流会を6年生が計画し、運営した。また、日常生活では委員会やクラブ活動や登校班などでも、自分の役割を自覚しながら、行動している。しかし、それらの行動が、最高学年として学校のみみんなのために何かしていきたい、何かを残していきたいという気持ちにまでは高まっていない。

○資料観

本資料は、校章旗の揚げ降ろしの当番を引き受けた主人公である信二の気持ちの変化をもとに、学校の一員としての役割を自覚し、りっぱな校風を作らうとするまでの過程を取り上げた内容である。よい校風は、多くの先輩たちの努力によって培われてきたものであることに気付かせ、最高学年としての自己の在り方を見つめさせるのに効果的な資料である。5月に行われた運動会でも係の仕事として校章旗を掲げた児童もおり、資料の中にある校章旗の当番は、学校の一員としての役割を果たす具体例として児童にとっては身近に考えやすい資料である。

○指導観

導入では、実物の校章旗の提示し、先日行われた運動会の係で揚げ降ろしをした児童にその時の気持ちを話してもらおう。展開前段では、資料を読んだ後の感想を出し合う中で主人公の心情の変化を追う発問にしばり、児童の体験と重ねられるように、話し合いの時間を十分に取るようにする。安易に役割を引き受けてしまった主人公の気持ちを考えさせる時には、動作化を取り入れて表現させることで、主人公の気持ちに共感させていきたい。展開後段では、自分たちが学校のためにしていることについて振り返らせる。終末では、小方小学校出身の保護者から小方小学校に対する思いを話してもらおうことで、児童がよい校風を作るために自分たちはどうしていけばよいかについて、次の実践に結び付けていく意欲をもつことができるようにしていきたい。

7 本時の展開

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導 入	1 校章旗を見る。	○これは何でしょう。どんな時に使われているものでしょう。 ・学校の旗。 ・運動会や入学式などの行事に使われている。	○運動会で校章旗を揚げた児童にその時の様子を聞く。 ○校章旗を提示し、行事の中で校章旗を揚げることについての意味を説明する。
展 開	2 資料「ひるがえる校章旗」を読んで、話し合う。	○資料を読んで、みんなで考えたいこと、話し合いたいことを出し合ひましょう。 ・校章旗の当番を引き受けたときのこと。 ・毎日、当番をしているときのこと。 ・2月の寒い中、旗のひもがとけないときのこと。 ・卒業生と会って学校のことについて話をしたときのこと。 ○校章旗の当番を引き受けたのはなぜだろう。 ・軽い気持ちから。 ・おもしろそうだから。 ・やってみたい。 ・いい思い出になりそうだから。 ・今までの6年生もやってきたのだから、自分にもできそうだったから。 ○2月の寒さの中で旗のひもがほどけなかったとき、信二はどんなことをつぶやいていただろう。 ・何でこんなこと引き受けたのだろう。 ・少しもおもしろくないなあ。 ・寒くていやだなあ。 ・もう、やめてしまいたいなあ。 ・面倒くさいなあ。 ・毎日こんなことをして何になるのだろう。 ・今までの人はどんな気持ちでやっていたのだろうか。 ・引き受けたから、最後まで続けなくてはいけない。でも大変だなあ。	○子どもから自由に出た意見を受け止める。 ○主人公の「信二」の気持ちの変化に焦点を当てて考えていくことを伝える。 ○当番の仕事を引き受けた動機を問うことによって、信二が、仕事の意味も十分に考えず、学校の一員としての自覚もなく、興味本位で引き受けたことに気付かせる。 ○屋上の寒くて強い風の中での作業であること、それが毎日続くことを十分につかませたうえで発問する。 ○動作化を取り入れることで、実感的に考えさせる。 ○安易な気持ちで引き受けたが、仕事の困難さにぶつかって疑問を抱き、投げ出そうとする信二の気持ちを話すことで、児童自身の心の弱さを引き出す。

	3 自分たちの生活について振り返る。	◎卒業生に「あの旗を見ると、なんだか力がわいてくるんだよ」と言われた時、信二はどんなことを考えていただろう。 ・昔から続いているんだ。みんなやってきたのだから、ぼくもがんばろう。 ・校章旗の当番はすばらしい伝統だな。 ・ぼくたちの揚げる校章旗を、いつも見てくれている人がいてくれてうれしい。 ・ぼくたちの仕事は卒業生を力付けていた。そんなことも知らずに、当番を投げ出そうとした自分が恥ずかしい。 ・これからも続けて、りっぱな学校にしたい。 ○今日の学習について大切だと思ったことはどんなことですか。そのことについて自分を振り返ってみましょう。 ・自分たちも小方小学校が好きだ。学校のみんなのために、朝、校長先生と一緒に校門に立って挨拶運動をしている。挨拶をしてくれない人もいるけれど、挨拶は小方小学校の良いところなので、毎日がんばっていききたい。 ・登校班の班長でみんなが言うことを聞いてくれないことがよくあるけれど、みんなが学校に安全に行くことができるように、班長の仕事を果たしていきたい。 ・先生を迎える式で、代表として迎える言葉を言った。初めてのことで緊張したけれど、新しい先生にこの学校に来てよかったと思ってもらえるよう、良いところを伝えた。	○校章旗の揚げ降ろしの仕事ですが、学校の伝統を受け継ぎ、りっぱな校風を作ることになるのだということに気が付き、当番の仕事を大事に続けてりっぱな学校にしようと決意する信二の気持ちに共感させる。 ○今までの無責任な気持ちから、学校の一員としての自覚のうえに立った仕事に対する気持ちの変化を、児童にとらえさせるようにする。 ○学校の校風についてだけでなく、自分たちが学校のためにしていることに、どんなことがあるかを考えさせて、自分のことを振り返ることができるよう、支援する。
終末	4 小方小学校出身の保護者の方の話を聞く。	○小方小学校出身の保護者の方から、母校である小方小学校についての話を聞きましょう。	○保護者の方に、昔の学校の様子や小方小学校に対する思いを伝えてもらい、自分たちもこれから学校をよくしていこうとする意欲がもてるようにする。

8 評価

みんなで協力し合い、よりよい校風を作ろうとする意欲をもつことができたか。